欧米推理小説翻訳史

一九九二年五月十日　初版第一刷発行

著　者　長谷部史親
発行人　目黒考二
印　刷　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社　本の雑誌社
〒160　東京都新宿区新宿一―十七―一　LAND・DEN三階
電話　〇三（三三五二）五二九一　振替・東京五―五〇三七八
©1992 Fumichika Hasebe. Printed in Japan
定価は表紙に表示してあります
ISBN4-938463-26-1 C0395

活字倶楽部

本の雑誌社

長谷部史親

欧米推理小説翻訳史

はじめに

推理小説ブームと呼ばれるようになって久しい。日本の作品にしても、また海外の作品の翻訳にしても、ともに年間の新刊点数が数百点に及ぶ状況が続いている。もはや一過性のブームなどではなくて、推理小説という文学形態が日本の読書文化の中に定着し、すでに確固たる位置を占めているのだと断言してもよかろう。

そもそも日本の近代文学は、明治維新以来の西洋文化の急激な移入に伴って、外国から伝来したものに多大な影響を蒙りつつ発展してきた。とりわけ推理小説の場合は、もちろん明治以前の日本古来の文化との関係を全く無視するわけにはいかないにしても、西洋の作品からの影響を濃密に受けている。そしてその影響は、主に翻訳という手段によってもたらされた。日本人の作品であれ、また翻訳作品であれ、現在日本で読まれている推理小説を考える上で、西洋の作品が移入され、そして日本の読者に受容されてきた足どりをたどることは、きわめて重要性のある主題のように思われる。

だが、漠然と推理小説の翻訳史といっても、時空ともに広範囲にまたがっているために、そうそう簡単に全貌を把握することはできない。問題に切り込む方法にしても、いろいろなものが考えられる。本書では一つの試みとして、何らかの意味で日本へ影響を及ぼした作家たちを選び出し、個々の作家の翻訳史にスポットを当てるという方法を採用してみた。過去の翻訳書やその周辺の文献に基づいて、特定の欧米作家が日本に初めて紹介されてから、翻訳を通して読者を獲得し、時には飽きられ忘れ去られるまでの経過をなぞりつつ、おのずと浮かび上がってくるものがあるはずである。

なお本書では、個々の作家ごとに一まとまりの論考として完結するように、場合によっては事実関係の叙述が重複している箇所もある。とくに太平洋戦争前後の翻訳出版界の事情などについては、話の展開の必要に応じて随所で繰り返した。通読する際にはいささか煩わしいかもしれないが、各作家相互の関連性にも鑑みて諒とされたい。

また、一部例外もあるが、原則として書名、雑誌名は『―』、作品名および本文中の引用箇所は「―」、そして全集叢書類の名称は《―》（ただし括弧で括った際は記号省略）で表記した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

装丁　多田　進
叢書名デザイン　太田和彦

目次

はじめに　2
アガサ・クリスティー　10
S・S・ヴァン・ダイン　26
ジョンストン・マッカレー　42
R・オースチン・フリーマン　58
ガストン・ルルー　72

フリーマン・ウィルズ・クロフツ　88
フランス推理小説の怪人たち　104
J・S・フレッチャー　118
アルフレッド・マシャール　132
草創期の短篇作家たち　142
モーリス・ルブラン　156

エドガー・ウォーレス 170
ドイツ文化圏の作家たち 184
ディクスン・カー 202
G・K・チェスタトン 216
あとがき 231
索引 243

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

アガサ・クリスティー　Agatha Christie (1890—1976)

コナン・ドイルのシャーロック・ホームズものを除けば、おそらくアガサ・クリスティーの作品が、世界で最も親しまれている推理小説だといっても過言ではあるまい。最初の長篇『スタイルズ荘の怪事件』を一九二〇年に上梓して以来、一九七六年に物故するまでの間に数多くの良質の作品をコンスタントに書き続けた彼女は、〝犯罪の女王〟の異名をとるほど世界各地で親しまれ、そうした功績によって英国王室から〝デイム〟(Dame) の称号を贈られている。その人気は歿後十数年を経た現在でも衰えず、たとえばユネスコで編集刊行している『文化統計年鑑』における翻訳図書の著者別頻度ランキングなどで、彼女の名前が常に上位を占めていることからも充分に立証されよう。

このような状況はわが国でもほぼ共通しており、毎日新聞社が戦後から逐年にわたって実施している『読書世論調査』では、クリスティーの名を「好きな著者」に挙げる人が、とりわけ女性読者を中心に近年目立ってきている。そして現実に、各出版社が競って発行している文庫

本などに関しても、クリスティーの作品が安定した売れ行きを示しているという観測が聞かれる。この作家の作品の魅力がどのあたりにあるのかというような本質的論議はとりあえず措くとして、その移入の経緯を簡単に探ってみることにしたい。

手もとの資料で確認できるかぎりにおいて最も早い時期のクリスティーの邦訳は、雑誌『新青年』の大正十三年五月号に掲載された短篇「メンタルテスト」である。これには「ポワロの頭」という冠称がつけられており、以後その総題のもとで同年十月号まで「総理大臣の失踪」「海辺の出来事」「クラブのキング」「別荘の惨劇」「チヨコレートの函」の六話が連載された。このときの訳者名は河野峯子となっているが、さらに六話を加えた全十二話で、翌大正十四年八月に『新青年』発行元の博文館の《探偵傑作叢書》第三十七編『クラブのキング』のタイトルで刊行された際には、延原謙名義に改められている。諸般の事情から推測するに、河野峯子が延原謙の別名であった可能性が高い。

探偵傑作叢書『クラブのキング』博文館（大正14年）

この『クラブのキング』の原書は、*Poirot Investigates* という短篇集で、『スタイルズ荘の怪事件』『秘密組織』『リンクスの殺人事件』

の三長篇に続くクリスティーの四番目の著書として、一九二四年三月にロンドンのジョン・レーン社から刊行されたものである。一九二四年は日本では大正十三年にあたり、その三月にイギリスで出たものを仮に船便で日本に取り寄せて、それを読んで翻訳して雑誌に掲載したという手順を考えると、到底『新青年』の五月号には間に合うはずがない。それでは、どのような経緯をたどったのかといえば、もともとこの原書に収録された短篇作品は、編集者の勧めに応じて一九二三年三月から『スケッチ』という一般雑誌に連載されたものである。したがって翻訳も、少なくともはじめのいくつかは、本国での雑誌初出に基づいている公算が大きい。

いうまでもなく訳者の延原謙は、ドイルのホームズ物語の訳者として名高いわけだが、必ずしもそれのみならず、とりわけイギリスの推理小説界の動向には敏感で、精力的に洋書や雑誌を取り寄せていた。それゆえクリスティーが本国で高く評価されている情報を得ることができたのであろうが、それにしてもこの短篇群を『スケッチ』のような推理小説専門でない雑誌から発見したのだとしたら、その慧眼にはおそるべきものがある。短篇集『クラブのキング』は、原書とは作品の排列が異なるものの、本国での刊行の翌年に早くも邦訳書が出た例として記憶に値するとともに、一九二〇年代以降にデビューした英米の推理小説作家の中で最初の邦訳書でもあった。この延原謙が、クリスティー邦訳史の劈頭を飾る立役者であったといえよう。

実際に翻訳の筆をとったのみならず、延原謙は大正末期から昭和初年にかけて『新青年』誌

上に再三にわたってクリスティーに関する随筆や新作の書評なども執筆している。いずれもさして長いものではなく、どちらかといえば些細なことのように思われるかもしれないが、読者にクリスティーという女流作家の名前をなじませようと努力した点で、やはり特筆すべき業績であろう。史的意義の上で、クリスティーは一九二〇年代のイギリス推理小説を先導する役割を果たした重要な作家だったせいもあり、また当時の日本の推理小説界に新たな潮流をもたらす試みでもあったからである。

大正から昭和に移ろうとする時代の翻訳推理小説の主流は、ポオ、ドイル、ルブランなどを除くと、現在ではあまり評価されない作家の作品が殆どを占めていたといっても過言ではない。それら多くのうちオプンハイム、フレッチャー、ル・キュー、エドガー・ウォーレスらは、その多作ぶりも相俟って、前世紀末から今世紀初頭にかけての英国読書界で一世を風靡した通俗的な作家として史上に位置づけられるが、他はどちらかといえば本国でもあまり記憶されていないような群小作家が多い。

またアンソニー・ホープの『ゼンダ城の虜』、ライダー・ハガードの『洞窟の女王』、あるいはR・L・スティーヴンスンの『ジキル博士とハイド氏』などの作品が、当時の日本では推理小説のひとつの典型と捉えられていた事情も無視できない。イギリスの推理小説が、豊かな散文文学の伝統を継承し、犯罪実話読物や通俗小説の成果をとりいれつつ発展してきたのは事実

であり、ある意味では冒険小説から派生した部分も少なくない。それゆえハガードであれスティーヴンスンであれ、先にあげた作家やその作品群と推理小説との縁には浅からぬものがあるのである。そしてまた、日本の推理小説の温床となった明治期の黒岩涙香らの翻案作品も、ガボリオやデュ・ボアゴベーらの推理小説を含めてデュマやユーゴーなどフランスものが多かったにせよ、その内容は浪漫性の勝ったものが殆どであった。『ゼンダ城の虜』や『洞窟の女王』を推理小説として扱うことに、現時点ではいささかの違和感があろうとも、それは発展途上における日本の推理小説界がくぐり抜けるべき必然的な通過点であったのだといいうる。

しかるにイギリスではドイルなどの影響のもとに、すでに日本の明治末から大正初期の時点において、知的かつ文学的な推理小説がひとつのジャンルを形成しつつあった。フリーマンはソーンダイク博士を主人公に続々と作品を発表し、また必ずしも推理小説専門とはいいがたいメースンが一九一〇年に『薔薇の別荘』を、そしてベントリーが一九一三年に『トレント最後の事件』を上梓している。日本ではそうした作風が受け入れられるには、もう少し時間の経過が必要であったと見るべきであろう。かくして大きなギャップが生じている状況の中で、一九二〇年にデビューしたばかりのクリスティーに、いち早く着目した延原謙の見識もしくは情報収集能力は並大抵のものではない。

『クラブのキング』以降の延原謙によるクリスティーの邦訳作品には、『新青年』昭和二年四

雑誌『探偵文芸　一週年紀念特輯号』大正15年4月号・奎運社に掲載されたクリスティーの短篇「毒薬」

月号に一挙掲載された中篇「敗れし人」(現在の邦題は「負け犬」)がある。そして同誌の翌年一月号から五月号にかけて連載された長篇「リンクスの殺人事件」が続く。これは二年後の昭和四年十月に、博文館の《世界探偵小説全集》第十一巻に収録されており、わが国で初めて本の形で刊行されたクリスティーの長篇ということになろうか。

しかしながら延原謙の活躍のみに終始するわけではなく、この時期のクリスティー邦訳史に関しては、松本泰の名前も書き漏らすことができない。慶応大学出身で『三田文学』に拠って抒情的な純文学を発表していた松本泰は、英国に遊学中に推理小説の魅力にとりつかれ、帰朝後はもっぱら異国情緒に富んだ独自の推理小説を書き始めた。それと同時に奎運社という出版

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb